

エピクロス哲学に対する エウセビオスの「肯定的」反応について

三上 章

キーワード：エウセビオス、『福音の準備』、エピクロス、H. ジョーンズ
Eusebius, *Praeparatio evangelica*, Epicurus, H. Jones

はじめに

エピクロス主義は、無神論と快楽主義の悪評をもつかぎりにおいて、キリスト教指導者たちにとって好ましくない存在であるといえよう。すでに初期キリスト教教父たちにとっても、そうであった。ジョーンズ (H. Jones) の研究によると、彼らはエピクロス哲学に対して概して否定的な反応を示したという。少数ながら「肯定的」に見える反応もあるにはあるけれども、①迷信の拒絶、およびその根底にある運命論の拒絶と人間の自由意志の肯定 ②エピクロス的人格への尊敬、の二要素にかざられる。しかし、それはエピクロス哲学を積極的に認める性格のものではなく、それをキリスト教の保持・拡大のために便宜的に利用しようとする、見かけの肯定である、とジョーンズは主張する¹。たとえば、アレクサンドリアのクレメンスは、『プロトレプティコス (ギリシャ人への勧告)』(*Protrepticus*) において、ピロデモスと共に、同一のエピクロスの出典 (おそらく Paedrus) に依拠している形跡を示している。しかしエピクロスの名前は口にしない。オリゲネスは、ギリシア人たちの慣行である占い術に反対するために、ペリパトス学派とエピクロス派を持ち出している²。ラクタンティウスは、エピクロスの教説を口にすることはしないが、エピクロスの傾向を示す箇所を3回ルクレティウスから引用している³。以上に挙げたのはいずれも便宜上の不本意な依拠である。

-
1. H. Jones, *The Epicurean Tradition* (Routledge, 1989) ch. 4: The Christian Reaction, 94-116.
 2. *Contra Celsum*, 7.3; 8.46.
 3. Lactantius, *Divinae institutiones*, 1.16.3; 1.21.45; 2.2.10-11 : Lucretius, *De rerum natura*, 1.931, 2.14, 5.5, and 6.1197ff. Cf. *The Epicurean Tradition*, 112-113.

しかしながら、エピクロス哲学に対する初期キリスト教教父の態度はそのようなものにつきるかという、そうではない。興味深いことに、ジョーンズは例外的事例としてエウセビオス (Eusebius, 後263頃-339) に言及する。すなわち、エウセビオスはその著『福音の準備』(Εὐαγγελικὴ προπαρασκευή, *Praeparatio evangelica*, 以下PEと略す)において、ペリパトス派、キュニコス派、エピクロス派の人たちがギリシャ的環境の中で育ったにもかかわらず、託宣や占いの慣行を拒絶したことを賞賛するとともに、「特にこの私が感服するエピクロス派の人たち」(Ἐπικούρειοι, οὐς καὶ μάλιστα ἔγωγε ἐθαύμασα)という文言を残している⁴。もちろんこれを額面どおりに受け取ることは早計であろう。ジョーンズはこの箇所以外にも一箇所エウセビオスに言及するが、ここでは、神々はもっぱら快を楽しむだけで他になにもしないというエピクロスの神観に反対する教父たちの一人に彼を挙げている⁵。つまり、ジョーンズが、エピクロス派の考え方にエウセビオスは肯定的であるとして言及するのは、この箇所だけであり、しかもその肯定は、彼らが異教の「託宣や占いの慣行を拒絶した」という点に限定されている。さらにジョーンズのこの発言は、教父がエピクロス哲学に言及するのは概してキリスト教の宣伝と維持のための便宜的利用である、という文脈の中で語られていることにも、留意すべきである。

以上のように、ジョーンズがエウセビオスの肯定的反応に言及するのは、一箇所だけにとどまり、この問題にさらに立ち入ることもしていない。しかし、このことを勘考しなければならないとしても、彼が挙げたPEの箇所は、本稿筆者にとって非常に興味深いものであり、エピクロス哲学に関するエウセビオスの「肯定的」姿勢を期待させさえするものである。実際、エウセビオスは、この箇所をはじめ、PEの随所でエピクロス哲学・エピクロス派への言及を行っている。本稿の目的は、それらの箇所を分析することにより、はたしてエウセビオスはエピクロス哲学に対して肯定的であるのか、そしてもし肯定的であるならば、どのような意味でそうであるのかという問題を解明することにある。

解明の作業に取りかかるにあたり、そもそもエウセビオスは、エピクロス哲学をどの程度知っていたのであろうか、ということを押さえておく必要がある。エピクロス哲学に関する主要な資料⁶とそれらに関する知識に関するかぎり、エウセビオスは、エピクロスに関する一次資料に相当するディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』(*Vitae philosophorum*)、『主要教説』(*Kyriai doxai*)、『ヴァチカン箴言集』(*Sententiae Vaticanae*) や、重要な二次

4. PE, iv. 2. 13; iv. 3. 14. Cf. H. Jones, *The Epicurean Tradition*, 112-113. なお、PEのギリシャ語テキストとして、TLG (*Thesaurus Linguae Graecae*) を使用した。邦訳は基本的に本稿筆者によるものであるが、随所で *Eusebius of Caesarea, Praeparatio Evangelica (Preparation for the Gospel)* tran. E. H. Gifford (1903) を参照した。

5. Eusebius, *Theophania*, 2.19. Cf. H. Jones, *The Epicurean Tradition*, 97.

資料であるルクレティウスを利用できる環境の中になかった。ただし、エピクロスの手紙については多少の知識をもっていた⁷。他方、プルタルコスには通暁しており、しばしば引用を行う⁸。ただし、プルタルコスは基本的に反エピクロス哲学の立場をとっており、そのエピクロス哲学の取扱には偏見がないとはいえないので、取り扱いには注意を要する。エウセビオスがPEにおいて用いたエピクロス哲学に関する資料は、主として、上述した主要な著作家以外のさまざまな古典著作家たちであり、名前を挙げるなら、ディオゲニアヌス、アレクサンドリアのディオニュシオス、アッティクス、ガダラのオイノマオス、ヌメニオスなどである。その中には著作が現存しておらず、エウセビオスによって断片が伝えられているだけのものもあり、その点では史料的价值を有するものが多い。

PEは全15巻から構成され、古代ヘブライ人の宗教と他宗教・諸哲学との比較をその内容とするが、引用に次ぐ引用の行進がその特徴である。とはいえ、それはぞんざいということではない。エウセビオスの言うところによると、自分の言葉が陥りがちな独断をできるだけ回避し、論証の客観性を保持するためにとった意図的な方法論なのである⁹。つまり彼は、自分の考えを古典著作家たちに代弁させるという方法を選択したのである。それでは彼が引

-
6. エピクロス(前341～前271)の著作は300巻に上るが、現存しているものはわずかである。ディオゲネス・ラエルティオス(Διογένης Λαέρτιος, *Diogenēs Laertios*; fl. c. 3rd century)が『哲学者列伝』(*Vitae philosophorum*)の第10巻「エピクロス伝」に収載した三つの書簡、『ヘロドトス宛書簡』(*Epistula ad Herodotum*)、『ピュトクレス宛書簡』(*Epistula ad Pythoclem*)、『メノイケウス宛書簡』(*Epistula ad Menoeceum*)。これらの書簡に加えて、ディオゲネスは40の『主要教説』(*Kyriai doxai*)を伝えている。さらにヴァチカン写本中には、『ヴァチカン箴言集』(*Sententiae Vaticanae*)が残っている。また、18世紀に行われたヘラクラネウムの発掘によって発見されたパピルスの巻物には、エピクロス『自然について』(*De natura*)の数巻の断片や、キケロと同時代に活動したエピクロス派の哲学詩人、ガダラのピロデモスの著作の断片も含まれている。エピクロスの教説の詳細については、ローマの詩人ルクレティウス(Titus Lucretius Carus, 前99頃-前55年)の『事物の本性について』(*De rerum natura*)、キケロ(Marcus Tullius Cicero, 前106-前43)の『善と悪の究極について』(*De finibus bonorum et malorum*)、『神々の本性について』(*De natura deorum*)、『トゥスクルム荘対談集』(*Tusculanae disputationes*)、プルタルコス(Πλούταρχος, Plutarchus, 46から48頃-127)の『迷信について』(*De superstitione*)、『エピクロスに従っては、快く生きることは不可能であること』(*Non posse suaviter vivi secundum Epicurum*)、『コロテス論駁』(*Adversus Colotem*)、セネカの『倫理書簡集I』(*Epistulae Morales*)などがある。
7. エウセビオスが行った引用の中に、おそらく後2世紀に生きたペリパトス学派の哲学者アリストクレス(Aristocles of Messene, Ἀριστοκλήης)のものと思われる引用があり、これによりエウセビオスは、エピクロスの『道徳的習慣に関する手紙』を知っていたであろうことが推定できる。PE, xv. 2. 1.
8. Cf. Plutarchus, *De Placitis Philosophorum*, 747d2. エウセビオスは、プルタルコス経由で、エピクロス派を含む哲学諸派に関する知識を得ていた。PE, xiv. 13. 9.
9. PE, i. 5. 14.

用する箇所即して、その肯定的反応如何を吟味していくことにしたい。

1 「託宣」(μαντική) に対する批判

1.1 デイオゲニアノスからの引用

デイオゲニアノス (Διογενιανός, Diogenianus) は、ハドリアヌス帝統治の時代 (後 117–138) に活動したポントウスのヘラクレア出身のギリシャの文法学者である。以下のデイオゲニアノスからの引用によって、エウセビオスは、ユダヤ・キリスト教の範疇外でなされる「予言」に対する反論を意図している。

Text 1

ἀλλὰ περὶ μὲν τοῦ μὴ συνεστάναι τοῦτο, ὃ προειλήφασμεν καλεῖν μαντικὴν, ἐν ἄλλοις ἀποδώσομεν πληρέστερον, παρατιθέμενοι τὰ Ἐπικούρω καὶ περὶ τούτου δοκοῦντα. νυνὶ δὲ τοσοῦτο τοῖς εἰρημένοις προσθήσομεν, ὅτι μάλιστα μὲν τὸ ἀληθεύειν ποτὲ τοὺς καλουμένους μάντιες ἐν ταῖς προαγορεύσεσιν οὐκ ἐπιστήμης, ἀλλὰ τυχικῆς αἰτίας ἔργον ἂν εἴη.

しかし私たちが託宣と呼ぶことを選んだこのことが、統合性をもたないことについては、私たちは他の所でより十分な証拠を挙げ、この点に関するエピクロスの見解も提示するつもりである。しかし目下のところ、すでに語られたことに以下のことだけを付け加えておくことにしよう。すなわち、特に、いわゆる託宣者たちが時には予言という仕方でも真理を語ることは、知識のわざではなく偶然的原因のわざであろう¹⁰。

デイオゲニアヌスは、長い間、アカデメイア派・ペリパトス派の学問的伝統に位置づけられると考えられていたが、今日ではエピクロス派の立場から発言した蓋然性があると考えられている¹¹。もしそうであるならば、「エピクロスの見解も提示するつもりである」という賛同的姿勢も、うなずけることである。いわゆる予言なるものは、「知識のわざではなく偶然的原因のわざ」であるという見解も、エピクロスの予言批判と呼応する。この引用から、「託宣」の拒絶に関しては、エウセビオスはエピクロスを同盟者と見なしていることを読み取ることができる。

10. *PE*, iv. 3. 5.

11. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism* (Cambridge University Press, 2009) 52.

2 エピクロスの原子論に対する批判

2.1 プルタルコスからの引用

以下はプルタルコス (Plutarchus, 後46から48頃-127頃) からの引用である。

Text 2

συμβεβηκέναι δὲ τοῖς σώμασι τρία ταῦτα, σχήματα, μέγεθος, βάρος· ἀλλ' ὁ μὲν Δημόκριτος ἔλεγε μέγεθος καὶ σχῆμα, ὁ δὲ Ἐπίκουρος τούτοις καὶ τρίτον βάρος προσέθηκεν.

.....
..... αἱ δὲ ἄτομοι ἀπαθείς, ἄθραυστοι· ἴδια δὲ ἔχειν σχήματα λόγῳ θεωρητά· καὶ εἴρηται ἄτομος οὐχ ὅτι ἐστὶν ἐλαχίστη, ἀλλ' ὅτι οὐ δύναται τμηθῆναι, ἀπαθῆς οὐσα καὶ ἀμέτοχος κενού·

そして物体はこれら三つの特性——形、大きさ、重さ——をもつ。しかしデモクリトスは二つ——大きさと形——を唱えたが、エピクロスはそれらにまた三番目のもの、すなわち重さを加えた。

.....
..... 原子は作用を受けることがなく、破壊されることがない。しかしそれらは理性によって観想されうる特有の形をもつ。そして「原子」がそう呼ばれるのは、それが極小であるからではなく、分割されることができず、作用を受けることができず、空虚を分有しないからである¹²。

これによりエウセビオスが、デモクリトスやエピクロスが提示した「原子」(ἄτομοι)の性質に関して基本的な知識をもっていたことがわかる。「デモクリトスは二つ——大きさと形——を唱えたが、エピクロスはそれらにまた三番目のもの、すなわち重さを加えた」とあるように、プルタルコスをとおしてエウセビオスは、デモクリトスの原子論とエピクロスの原子論の相違点を認識していたことがわかる。

2.2 アレクサンドリアのディオニュシオスからの引用 1

以下は、アレクサンドリアのディオニュシオス (Dionysius Alexandrinus, 後200頃-265頃) からの引用である。彼はオリゲネスの弟子であり、アレクサンドリアの司教であった。オリゲネスの学問的伝統に立つエウセビオスは、ディオニュシオスから引用することが

12. PE, xiv. 14. 5.

できた。ディオニュシオスがどれだけエピクロスの著作を直接に読んでいたかは疑わしいが、彼がエピクロス哲学に真剣な関心をもっていたことは確かであるといえよう¹³。

Text 3

οἱ μὲν γὰρ ἀτόμους προσειπόντες ἄφθαρτά τινα καὶ σμικρότατα σώματα πλῆθος ἀνάριθμα καὶ τι χωρίον κενὸν μέγεθος ἀπερίοριστον προβαλλόμενοι, ταύτας δὴ φασὶ τὰς ἀτόμους ὡς ἔτυχεν ἐν τῷ κενῷ φερομένας αὐτομάτως τε συμπιπτούσας ἀλλήλαις διὰ ῥύμην ἄτακτον καὶ συμπλεκόμενας διὰ τὸ πολυσχήμονας οὐσας ἀλλήλων ἐπιλαμβάνεσθαι, καὶ οὕτω τὸν τε κόσμον καὶ τὰ ἐν αὐτῷ, μᾶλλον δὲ κόσμους ἀπείρους ἀποτελεῖν. ταύτης δὲ τῆς δόξης Ἐπίκουρος γεγόνασι καὶ Δημόκριτος·

というのは、ある種の不滅で、数において無限の極小の物体に「原子」という名を与え、大きさにおいて境界のないある種の空虚な空間を想定したある人たちは、次のように言う。これらの原子は、空虚の中を無作為に運ばれており、不規則な漂流によって偶発的に互いに衝突し、もつれさせられる。なぜならそれらは多くの形をもち、お互いを捕らえ、かくして世界とそこにある万物を、あるいはむしろ数において無限の世界を完成させる。エピクロスとデモクリトスはそのように考えた¹⁴。

「大きさにおいて境界のないある種の空虚な空間」および「これらの原子は、空虚の中を無作為に運ばれており、不規則な漂流によって偶発的に互いに衝突し、もつれさせられる」という文言から、エウセビオスは、デモクリトスやエピクロスが提示した、空虚の中における原子の運動の教説に関する知識をもっていたことがわかる。

2.3 アレクサンドリアのディオニュシオスからの引用2

以下もディオニュシオスからの引用であるが、彼はエピクロスの原子論を批判する立場から、皮肉な問いを矢継ぎ早に浴びせかけている。

Text 4

πόσας γὰρ ἀτόμους ὁ Ἐπικούρου πατὴρ καὶ ποταπὰς ἐξ ἑαυτοῦ προέχεεν, ὅτ' ἀπεσπέρμαιεν Ἐπίκουρον; καὶ πῶς εἰς τὴν μητράν αὐτοῦ κατακλησθεῖσαι γαστέρα συνεπάγησαν, ἐσχηματίσθησαν, ἐμορφώθησαν, ἐκινήθησαν, ηὐξήθησαν, καὶ

13. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 61–62.

14. *PE*, xiv. 23. 2–3.

πολλὰς ἢ βραχεῖα ῥανὶς τὰς Ἐπικούρου ἀτόμους προσκαλεσαμένη τὰς μὲν ἐπημφίεσεν αὐτὸν δέρμα καὶ σάρκα γενομένης, ταῖς δὲ ὅστω θείσαις ἀνώρθωται, ταῖς δὲ συνεδέθη νευρορ«ρ»αφούμενος, τὰ τε ἄλλα πολλὰ μέλη καὶ σπλάγχνα καὶ ἔγκατα καὶ αἰσθητήρια τὰ μὲν ἔνδοθεν, τὰ δε θύραθεν ἐφήρμοσε, δι' ὧν ἐζφογονήθη τὸ σῶμα;

というのは、エピクロスの父親がエピクロスをもうけていたとき、自分自身の中から注ぎ出した原子はどれくらいの数があり、どのような種類のものだったのか。そしてそれらが彼の母親の体の中に封じ込められたとき、どのようにして合体し、形を与えられ、姿を与えられ、運動を与えられ、成長を与えられたのか。そしてどのようにしてあの小さな一粒が、エピクロスの大量の原子を呼び集め、あるものどもを彼の上に着せ、皮膚と肉にならせたのか。他方どのようにしてあるものどもは骨にされることによって彼は直立させられ、あるものどもと結び合わされて、彼は臍で綴られた者となったのか¹⁵。

エピクロスの原子論を拒絶するディオニュシオスの立場を色濃く反映する引用である。これを引用したエウセビオスの見るところでは、人間創造の神秘に関しては、エピクロスの原子論は十分な説明とはなっていないということであろう。「(原子が) どのようにして合体し、形を与えられ、姿を与えられ、運動を与えられ、成長を与えられたのか」、「どのようにして……皮膚と肉にならせたのか」、「どのようにしてあるものどもは骨にされることによって彼(エピクロス)は直立させられ、あるものどもと結び合わされて、彼は臍で綴られた者となったのか」といった疑問は、創造者による人間創造を確信する立場から投げかけられたものであると考えられる。それはとりもなおさずエウセビオスの立場でもあった。彼にとって、人間創造の神秘を思うにつけ、原子論による説明はとうてい受け入れることのできないものであった。

3 エピクロスの神観に対する批判

3.1 プルタルコスからの引用

以下はプルタルコスからの引用であるが、エウセビオスはエピクロスの神観に対して否定的であることを読み取ることができるであろう。

Text 5

Ἐπίκουρος ἀνθρωποειδεῖς μὲν τοὺς θεοὺς, λόγῳ δὲ πάντας θεωρητοὺς διὰ

15. PE, xiv. 26. 2.

λεπτομέρειαν τῆς τῶν εἰδώλων φύσεως.

エピクロスは、神々は人間の形をしているが、その姿の本性が極小な粒子であるためすべては理性によって観想されると考えた¹⁶。

エウセビオスの見るところでは、「神々は人間の形をしている」、「その姿の本性が極小な粒子である」、神々は「理性によって観想される」とするエピクロスの神観は、冒瀆である。それにひきかえ、神は世界を統治している精神であると考えられるソクラテス・プラトンの神観のほうが、古代ヘブライ人の正しい神観を反映しているかぎりにおいて、エウセビオスにとってはるかに受け入れるに値するものである¹⁷。神の本質に関する見解において、エウセビオスはエピクロスと一線を画しているといえる。

3.2 アレクサンドリアのディオニュシオスからの引用3

以下も、アレクサンドリアのディオニュシオスからのさらなる引用であり、エピクロスが想念する神々の無為無策に対する批判をその内容としている。特に下線部分に注目されたい。

Text 6

ψυχὴ δὲ καὶ νοῦς καὶ λόγος πόθεν ἐγγέγονε τῷ φιλοσόφῳ; παρὰ τῶν ἀψύχων καὶ ἀνοήτων καὶ ἀλογίστων ἀτόμων ταῦτ' ἠρανίσαστο κάκεινων αὐτῷ τι ἐκάστη νόημα καὶ δόγμα ἐνέπνευσε; καὶ ὡσπερ ὁ Ἡσιόδου μῦθος τὴν Πανδώραν φησὶν ὑπὸ τῶν θεῶν, οὕτως ἡ σοφία τὰνδρὸς ὑπὸ τῶν ἀτόμων συνετελέσθη; καὶ ποίησιν δὲ πᾶσαν καὶ πᾶσαν μουσικὴν ἀστρονομίαν τε καὶ γεωμετρίαν καὶ τὰς ἄλλας ἐπιστήμας οὐκέτι θεῶν εὐρέματα καὶ παιδεύματα φήσουσιν Ἕλληνες εἶναι, μόναι δὲ γεγόνασιν ἐμπειρικαὶ καὶ σοφαὶ πάντων αἱ Ἄτομοι Μοῦσαι; ἢ γὰρ ἐκ τῶν ἀτόμων Ἐπικούρου θεογονία τῶν μὲν ἀπείρων κόσμων ἐξόριός ἐστιν, εἰς δὲ τὴν ἄπειρον ἀκοσμίαν πεφυγάδευται.

それではまた魂と知性と理性は、どこからその哲学者の中に植え込まれたのか。彼は、魂も知性も理性ももたない原子からそれらを借用し、それらの一つ一つが彼に何らかの考えと教説のひらめきを与えたのか。またヘシオドスの神話が、パンドラは神々によって完成されたと言うのと同様に、人間の知恵は原子によって完成されたのか。そしてあらゆる詩作、あらゆる音楽、天文学および幾何学並びに他の学知は、もはや神々が発明

16. PE, xiv. 16. 10.

17. PE, xiv. 16. 11.

し教えたものではない、などとギリシャ人たちは言うだろうか。むしろ原子のムウサたちだけが、すべてのことの熟練者にして知者となったのか。なぜなら原子から構成されるエピクロスの神々の系譜は、無限定の秩序ある諸世界から追放され、無限定の無秩序の中へ放逐されてしまっているのだから¹⁸。

この引用によってエウセビオスは、エピクロス流の原子論は哲学者の中に植え込まれている「魂と知性と理性」の存在に関する説明にならないことを言おうとしているものと思われる。「原子のムウサたち」という皮肉めいた表現も、エピクロスの神観に対するエウセビオスの批判を増幅させたことであろう。詩作および音楽という人間にとってすぐれて文化的な営みが、まさか原子の無秩序な運動によるものであるなどということは、普通のギリシャ人たちにとってさえも笑止千万の話であったことであろう。エウセビオスの見るところでは、人間に備わる魂、知性、理性の創造的な力そのものが、原子論に対する強力な反証となるのである。

3.3 アレクサンドリアのディオニュシオスからの引用4

エウセビオスは、なおもディオニュシオスからの引用を繰り返すが、神々は「空虚」のなかに住まうというエピクロスの考え方に対する批判と揶揄がその内容となっている。

Text 7

Ἡ τοῦ κόσμου προκύψας Ἐπίκουρος καὶ τὸν οὐράνιον ὑπερβὰς περίβολον ἢ διατινων κρυφίαν ἃς μόνος οἶδεν ἐξελθὼν πυλῶν οὓς ἐν τῷ κενῷ κατεῖδε θεοὺς καὶ τὴν πολλὴν αὐτῶν ἐμακάρισε τρυφήν κάκειθεν ἐπιθυμητῆς γινόμενος τῆς ἡδονῆς καὶ τῆς ἐν τῷ κενῷ ζηλωτῆς διαίτης, οὕτω πάντας ἐπὶ τὴν τοῦ μακαρισμοῦ τούτου μετουσίαν ἐξομοιωθησομένους ἐκείνοις τοῖς θεοῖς παρακαλεῖ, συμπόσιον αὐτοῖς μακάριον οὐχ ὅπερ οἱ ποιηταὶ τὸν οὐρανὸν ἢ τὸν Ὀλυμπον, ἀλλὰ τὸ κενὸν συγκροτῶν ἕκ τε τῶν ἀτόμων τὴν ἀμβροσίαν αὐτοῖς παρατιθεῖς καὶ προπίνων αὐτοῖς ἐξ ἐκείνων τὸ νέκταρ;

はたしてエピクロスは世界からのぞき見し、天の周囲を超出したのか。あるいは彼しか知らない何らかの秘密の門を通して出て行き、空虚の中に住む神々を見てその大いなる贅沢を至福であると見なしたのか。そしてそれにより快樂の欲求者となり、空虚の中に住む生活の愛着者となったのか。かくして、かの神々に似る者とされるすべての人びとがこの至福に与るように勧めるのか。彼らのための至福の饗宴は、詩人たちが語った天

18. PE, xiv, 26. 12-14.

かオリュンポスではなく、空虚であり、そこでは彼は原子から造られたアンブロシアを彼らに供し、原子から造られたネクタルを彼らに献ずるというのに¹⁹。

「エピクロスは、……空虚の中に住む神々を見てその大なる贅沢を至福であると見なした」というディオニュシオスの理解は、おおよそ当を得ているが、「空虚の中に住む神々」というのは不十分な言い方である。エピクロスによると、神々の住まいは世界の中にはなく、無数の宇宙のあいだに存在する空間としての「世界間空間」(intermundia)の内にいる²⁰。この神の住居を空虚というのは、正確さを欠いている。しかし、エピクロスがこの住居に住まう神々の「大なる贅沢を至福であると見なした」というのは、まちがっていない。彼によると、神々はあらゆる煩いから解放された生を享受し、「平安な住居」(sedes quietae)に住んでいるのである²¹。これは、大なる贅沢であり至福であるといえるであろう。

4 エピクロスの神慮否定の考えに対する批判

エピクロスは「神慮」(プロノイア、*πρόνοια*)の教説を否定する。エピクロスの神々は、人間の営みに関与する行為や感情をもたない²²。神々は自然にもいっさい関与しない²³。エウセビオスは、そのような考えをアッティクス(Titus Pomponius Atticus, 前110-前32年)をとおして知っていた。アッティクスは、エピクロス哲学への傾倒者であるが、キケロの親友であった²⁴。

4.1 アッティクスからの引用1

以下のアッティクスからの引用は、神慮の教説を否定する点でエピクロスもアリストテレスも同類であることを述べており、神慮否定の考えを拒絶するエウセビオスの立場を読み取ることができる。

Text 8

παραπλησίως δὲ τούτῳ καὶ ὁ Περιπατητικὸς. οὐ γὰρ οὕτως ἢ περὶ τὴν ἡδονὴν σπουδὴ ὡς ἢ πρὸς τὸ θεῖον ὅτι κήδοιτο ἀπιστία τὴν ἀδικίαν ἐπιρρώννυσι.

19. *PE*, xiv. 27. 9.

20. Cicero, *De natura deorum*, I.18. Ciceo, *De finibus bonorum et malorum*, II.75. Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum*, X.89.

21. Lucretius, *De rerum natura*, III.18-24.

22. H. Usener, ed., *Epicurea*, 364.

・ ・ ・ ἀλλ' οὔτε τοῦτον οὔτε ἐκεῖνον δίκαιον ἐν προνοίας ἀριθμεῖσθαι λόγῳ. εἴπερ γὰρ καὶ κατ' Ἐπίκουρον τὸ τῆς προνοίας οἴχεται, καίτοι τῶν θεῶν κατ' αὐτὸν πᾶσαν κηδεμονίαν ὑπὲρ τῆς σωτηρίας τῶν οἰκείων ἀγαθῶν εἰσφερομένων, οὕτως ἂν οἴχοιτο καὶ κατ' Ἀριστοτέλην τὸ τῆς προνοίας, εἰ καὶ τὰ κατ' οὐρανὸν ἐν τάξει τινὶ καὶ κόσμῳ διοικεῖται.

この人（エピクロス）と同類であるのは、ペリパトス学派の人（アリストテレス）である。なぜなら快楽への愛着が、というよりはむしろ、（人間たちのことを）配慮する神

23. *Epistula ad Herodotum*, 76-77. *De rerum natura*, II.1090-1104:

Quae bene cognita si teneas, natura videtur
libera continuo, dominis privata superbis,
ipsa sua per se sponte omnia dis agere experts.
nam pro sancta deum tranquilla pectora pace
quae placidum degunt aevom vitamque serenam,
quis regere immensi summam, quis habere profundi
indu manu validas potis est moderanter habenas,
quis pariter caelos omnis convertere et omnis
ignibus aetheriis terras suffire feracis,
omnibus inve locis esse omni tempore praesto,
nubibus ut tenebras faciat caelique serena
concutiat sonitu, tum fulmina mittat et aedis
saepe suas disturbet et in deserta recedens
saeviat exercens telum, quod saepe nocentes
praeterit exanimatque indignos inque merentes?

このことをよく理解して忘れなければ、すぐに
自然は自由であり、高慢な主人をもたず、
神々の関わりなしに自ら気ままに万事をなしていることが分かるだろう。
なぜなら、穏やかな平和のうちに静かな日々をすごし
曇りない生を送っている神々の胸にかけてちかうが
誰が無限の宇宙の全体を支配し、誰が深淵の
力強い手綱をその手に握って導くことができようか？
誰がすべての天空を同時にめぐらせ
ゆたかな大地をアイテールの火であたため
すべての場所にすべての時におり、
雲で闇をつくり、晴れた空を雷鳴でうちふるわせ
それから電光をとばして、しばしば自分の神殿を
ぶちこわし、また荒野にしりぞいて
あれくるい、その投げる槍は、しばしば罪あるものを
みのがし、罪なきものの命をとるのか？

24. Cicero, *De finibus bonorum et malorum*, 5.1-3. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 27-28. アッティクスは『年代記』(*Liber annalis*)をはじめ、ローマ暦やローマの重要な家系に関する著作を書いたが、それらはすべて失われている。したがってエウセビオスのアッティクスからの引用は、史的価値を有する。

的な存在に対する不信のほうが、不正を増長させるのである²⁵。……しかしエピクロスもアリストテレスも、神慮の教説においては正しいと見なすことはできない。なぜならエピクロスの場合でも、神慮に属することが立ち消えになるからである。たとえ彼によると、神々はその固有の善きものどもを保全するために完全な孤独を導入するとしても、である。同様にアリストテレスの場合でも、神慮に属することが立ち消えになるであろう。たとえ天の下のもものどもが何らかの整列と秩序のうちに運営されるのであろうとも、である²⁶。

アッティクスは「(人間たちのことを) 配慮する神的な存在に対する不信のほうが、不正を増長させる」といい、倫理的観点から、神慮否定は人間の不正につながることを指摘する。それゆえ、「エピクロスもアリストテレスも、神慮の教説においては正しいと見なすことはできない」と、神慮否定説に対する反対を明言する。この反対は、とりもなおさずエウセビオスの立場でもあろう。

4.2 アッティクスからの引用2

しかしながら、驚くことに、以上の引用の直後に、エウセビオスは、エピクロスの神慮否定の考えを肯定するかのように見える、アッティクスの文言を引用する。

Text 9

ἐκεῖνο δ' ἐμοὶ κριτῆ καὶ αἰσχυνηλότερον ὁ Ἐπίκουρος δοκεῖ πεποικέναι· ὥσπερ γὰρ ἀπογνοὺς δύνασθαι τοὺς θεοὺς ἀποσχέσθαι τῆς ἀνθρώπων κηδεμονίας εἰς ταῦτόν ἐλθόντας αὐτοῖς καθάπερ εἰς ἀλλοδαπὴν ἀπόκισε καὶ ἔξω πού τοῦ κόσμου καθίδρυσε, τὸ ἀπάνθρωπον αὐτῶν τῆ ἀποστάσει καὶ τῆ πρὸς ἅπαντ' ἀκοινωνησίᾳ παραιτούμενος.

しかしその点（神慮否定）については、私の判断では、エピクロスは比較的節度のある仕方でも行動したように思われる。なぜなら彼は、神々が人間たちのところにやって来たにしても、人間たちの世話を回避することができるということを、まさに無罪放免にしたごとく、神々をよその所へ移転させどこか世界の外に居住させ、彼らの人間離れ状態の責めをその移転並びに万物との非協働のゆえに赦免したからである²⁷。

25. *PE*, xv. 5. 7.

26. *PE*, xv. 5. 8-10.

アッティクスのいうところでは、エピクロスは神慮を否定したにせよ、にべもなく否定したのではないのである。「比較的節度のある仕方」(αἰσχυνηλότερον) 否定したのである。すなわち、「神々をよその所へ移転させどこか世界の外に居住させ、彼らの人間離れ状態の責めをその移転並びに万物との非協働のゆえに赦免した」のである。このアッティクスの言い方は、肯定からはほど遠いといわなければならない。「比較的節度のある仕方」とは、肯定ではなく実は皮肉であり、エピクロスの姑息なやり方に対する非難を含んでいるように思われる。このことは、次のアッティクスからの引用から明らかとなるであろう。

4.3 アッティクスからの引用3

Text 10

ὄθεν εἰκότως ἂν καὶ αὐτὸς οὐδ' ἐκεῖνο τὸ ἔγκλημα ἐκφύγοι, ὃ κατ' Ἐπικούρου τινὲς μαντεύονται, ὡς ἄρα μὴ κατὰ γνώμην, ἀλλὰ διὰ τὸ πρὸς ἀνθρώπων δέος τοῖς θεοῖς κατένειμεν ἐν τῷ παντὶ χώρῳ ὥσπερ ἐν θεάτρῳ θέαν.

それゆえ、ある人たちがエピクロスに対して憶測しているあの告発を、彼自身も当然のことながら免れることはできないであろう。すなわち本当は自発的な判断によるのではなく、人びとに対する恐れゆえに、彼は神々に万物の中のある場所を割り当てたのである。ちょうど劇場の中のある観客席を割り当てるかのように²⁸。

アッティクスの見るところでは、エピクロスはほんとうは神々の存在を認めなくなかったのであるが、「人びとに対する恐れゆえに」、つまり保身のために神々を信じているふりをしたのである。それゆえエピクロスの提示する神々には真剣味が欠如しており、いわば劇場の観客のような神々である。ちょうど劇場の観客が、俳優のように自ら演技を行うのではなく、ただ観るだけであるように、エピクロスの神々は人間の世界を観るだけで、いっさいそれに

27. *PE*, xv. 5. 11.

28. *PE*, xv. 5. 12. エピクロスが神慮の考えに反対し、万物の説明のために「偶然」(αὐτόματον)の観念を導入したことは周知のことである。その意図は、極端な形での神慮の観念と時には区別をつかない、運命論から人間の自由意志を救うことにあった。興味深いことに、エウセビオスはヘブライ語聖書に言及することによって、偶然の観念を拒絶する。以下はアレクサンドリアのクレメンスからの引用である。

ναὶ μὴν Ἐπικούρῳ μὲν ἢ τοῦ αὐτομάτου παρεῖσθαι οὐ παρακολουθήσαντι τῷ ῥήτῳ γέγονεν ἐντεῦθεν· “Ματαιότης ματαιότητων, τὰ πάντα ματαιότης.

事実、エピクロスが「偶然」の導入を思いついたのは、以下の文言を正しく理解しなかったことによる。すなわち「空の空。万物は空」Cf. *PE*, xiii. 13. 4.

関与しない傍観者的な神々である、というのである。しかしながら、この批判は当たっていないように思われる。エピクロスが人間界に関与しない神々を提示したのは、保身のためではなかった。むしろ、人間に対していわれもなく怒り、罰を下し、人間から差し出された供え物によって態度を軟化する、恣意的な神々といった迷信的神観の呪縛から人間を解放し、平安を与えることが、エピクロスの意図するところであった²⁹。エウセビオスがアッティクスの見解をまるごと支持しているとはいえないにしても、少なくともエピクロスが神慮を認めないという点に関しては、アッティクスの批判を共有しているといえるであろう。

以上においてエピクロス哲学に関連する10のテキスト (Text 1～Text 10) を吟味した。これにより明らかになったことは、エピクロスが迷信的宗教において幅をきかせている託宣を拒絶した点に関しては、エウセビオスは彼の見解に対して文字どおり肯定的であるといえる。他方、エピクロスが創造者なる神による万物の創造を認めず、人間を含む万物への配慮を排除し、万物の生成を原子の運動に還元し、偶然性に重要な位置を与えた点に関しては、エウセビオスはエピクロスに対して否定的である。特に、エピクロスが神慮を否定した点に関しては、エウセビオスは彼の見解に対して断固否定的である。これまで見たところを総括するなら、エウセビオスは概してエピクロス哲学に対して否定的であるといわなければならない。彼の肯定的な点は、わずかに迷信的託宣の拒絶ということだけである。しかし、他には肯定的な点はないのであろうか。

5 エピクロスの人格とその共同体への共感

ジョーンズの指摘するところによると、キリスト教教父たちは、セネカ³⁰のような古典著作家に追随し、エピクロスの人格に対して尊敬を示しただけではなく、これに関連して、エピクロス主義とキリスト教のあいだにいくつかの類似点を認めた若干の事例があるという。すなわち、アンブロシウス、ヒエロニムス、ナジアンゾスのグレゴリオスらは、人口に膾炙されていた無神論・快楽主義としてのエピクロス主義に対しては断固反対したが、エピクロスの人格と生き方に関しては賞賛すべき点があることを識別していたというのである³¹。この点に関しては、エウセビオスも彼らと同一線上にあると思われる。これを証左するものが、以下のガダラのオイノマオスおよびアパメイアのヌメニオスからの引用である。

5.1 ガダラのオイノマオスからの引用

オイノマオス (Oenomaus Gadareus) は、後2世紀に活動した非キリスト教徒であり

29. Lucretius, *De rerum natura*, l.62–69, 78–79, 151–154, 931–932.

30. *De vita beata*, 12.4. Cf. H. Jones, *The Epicurean Tradition*, 113.

キュニコス派哲学者である。エウセビオスという人は、このような立場の人物からさえ引用を行うことができたのである。

Text 11

ἀλλὰ καὶ τὸν Ἐπίκουρον, ὃν σὺ πολλά, ὦ Χρῦσιππε, ἐβλασφήμησας, ἐγὼ τὸ γε ἐπὶ σοὶ ἀφίημι τῶν ἐγκλημάτων. τί γὰρ πάθη ὃς οὐχ ἑκὼν ἦν μαλακὸς οὐδὲ ἄδικος, ὥσπερ πολλάκις αὐτὸν ἐλοιδόρησας;

しかし、クリュシッポスよ、君がしばしば讒言したエピクロスでさえ、この私は君に免じて数々の告発を赦免する。なぜなら、自分から進んで贅沢することなく不正も行わなかった人物が、どうして告発されなければならないのか。君がしばしば彼を罵倒したようにね³²。

オイノマオスは、エピクロスに「自分から進んで贅沢することなく不正も行わなかった人物」という評価を与えた。この評価は、エピクロスの人物像を適切に言い当てている。彼は実際にそのように清廉潔白な人物であったといえる³³。このエピクロスの人格に対する肯定的評価に関しては、エウセビオスは、オイノマオスに素直に共感することができたと見てよいであろう。

5.2 アパメイアのヌメニオスからの引用

アパメイアのヌメニオス (Numenius Apamensis) は、シリアのアパメイアに住み、後2世紀後半に活動したギリシャ哲学者、新ピユタゴラス学派の人および新プラトン主義者の先駆者である。彼は、エピクロスの園が後1世紀の遅い時期においても、いまだアテナイに存続していたことを示す貴重な証人でもある³⁴。

31. Ambrosius, *Epistulae*, 63.19; Hieronymus, *Contra Jovinianum*, ii.11; Gregorius Nazianzenus, *Poemata Moralia*, X.787ff. Cf. H. Jones, *The Epicurean Tradition*, 113.

なお、ジョーンズが指摘する、エピクロス主義とキリスト教との類似点は以下のとおりである。すなわち迷信への反対、運命論の拒絶、人間の自由意志の擁護、政治的生活への参与の忌避。Cf. H. Jones, *The Epicurean Tradition*, 115. さらにこれらに加えて、ジョーンズは、エピクロスの園とキリスト教共同体の類似性を挙げる。Cf. H. Jones, *The Epicurean Tradition*, 116. 両者において、個人はそれぞれの共同体の一員であった。個人は、前者の場合ピリア (φιλία) によって、後者の場合アガペー (ἀγάπη) によって互いに親密に結び合わされていた。そしてそれぞれの創設者は中心的・求心的役割を演じた。

32. *PE*, vi. 7. 41. Oenomaus, *The Selection of Impostors*, 255b1.

Text 12

ἔοικέ τε ἡ Ἐπικούρου διατριβὴ πολιτεία τινὶ ἀληθείᾳ, ἀστασιαστοτάτῃ, κοινὸν ἕνα νοῦν, μίαν γνώμην ἔχουσῃ· ἀφ' ἧς ἦσαν καὶ εἰσὶ καί, ὡς ἔοικεν, ἔσονται φιλακόλουθοι.

かくしてエピクロス学派は、何らかの真の国家のようであり、完全に内乱がなく、共通の一つの精神、一つの見解を保持している。そのことのゆえに、彼らは熱心な弟子たちであったし、今もそうであり、おそらくこれからもそうであろう³⁵。

この文言は、エピクロスその人ではなくエピクロス学派に関して語られたものである。ヌメニオスはエピクロス派の一致と和合を賞賛するが、エピクロス哲学を手放しで肯定しているわけではない。ヌメニオスは、ピュタゴラスとプラトンをこよなく尊敬する人物であるが、彼がこの文言を語るのには、プラトンの後継者たちが彼の教説を弱体化し歪曲したことを嘆く文脈においてである³⁶。そして彼がその嘆きを正当化するために引き合いに出すのが、ピュタゴラス派とエピクロス派である。ピュタゴラスの友人たちは彼の教説を遵守した結果、ピュタゴラスの名声をとどろかせることとなった。同様にエピクロス派の人たちも、そうする義務はなかったにもかかわらず、エピクロスの教説を遵守した。それらから決して逸脱せず、それらを変更することもなかったというのである。このテキストが示すエピクロス派の一致と和合の点に関しては、エウセビオスは素直な共感をもつことができたと思われる。

33. 以下に、エピクロスが語ったとされる言葉をいくつか紹介しておきたい。

『エピクロス—教説と手紙— (岩波文庫)』収録の「手紙からの断片」37。

βρυάζω τῷ κατὰ τὸ σωματίον ἡδεῖ, ὕδατι καὶ ἄρτῳ χρώμενος, καὶ προσπτύω ταῖς ἐκ πολυτελείας ἡδοναῖς οὐ δι' αὐτάς, ἀλλὰ διὰ τὰ ἐξακολουθοῦντα αὐταῖς δυσχερῆ.

水とパンで暮らしていれば、わたしは身体上の快樂に満ち満ちておられる。そしてわたしは、ぜいたくによる快樂を、快樂それ自身のゆえにはではないが、それに付随していやなことが起こるがゆえに、唾棄する。

「手紙からの断片」39

πέμπω μοι τυροῦ κυθρίδιον, ἵν' ὅταν βούλωμαι πολυτελεύσασθαι δύνωμαι.

チーズを小壺に入れて送ってくれたまえ。したいと思えば豪遊することもできるから。

Sententiae Vaticanae, 70

Μηδέν σοι ἐν βίῳ πραχθεῖν ὃ φόβον παρέξει σοι εἰ γνωσθήσεται τῷ πλησίον.

もし隣人に知られたならば、君を怖がらせるでもあるようなことを、君は、一生にひとつでも、おこなうべきではない。

34. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 48 n.12.

35. *PE*, xiv. 5. 3.

36. *PE*, xiv. 5. 1-3.

結論

本稿は、エウセビオスが*PE*において提示するエピクロス哲学に関する引用を分析することにより、はたして彼はエピクロス哲学に対して肯定的であるのか、そしてもし肯定的であるならば、どのような意味でそうであるのかという問題の解明を行った。

ジョーンズの見解によると、教父たちの肯定的反応はエウセビオスのそれを含めて、概して便宜的なものであり、本心からのものではなかったということである。これに対して、本稿が行った分析によると、エウセビオスに関するかぎり、必ずしもそうではなかったということがいえる。少なくとも、エピクロスが迷信的託宣を拒絶したこと (Text 1)、エピクロスの質素で正しい生 (Text 11) およびエピクロス派の一致と和合 (Text 12) に関しては、エウセビオスは素直に賛同し共感することができた。キリスト教の外にあるエピクロス哲学の中にさえ、たとえ少しではあっても、宗教性と道徳性の面で肯定できる点を見抜くことができたということは、まさにエウセビオスの炯眼といえる。彼が頻繁に行う、エピクロス主義を代表すると見なされるディオゲニアノス (Text 1)、アッティクス (Text 8~Text 10)、オイノマオス (Text 11) といった作家たちからの引用も、たんに便宜のためではなく、議論の客観性と公平性を尊重するエウセビオスの理性的資質を表すものであると見ることができる。

他方、エピクロス哲学の中核をなす原子論に対しては、エウセビオスは大体において否定的である。彼は原子論に関して基礎的な知識を持ち合わせており (Text 2~Text 3)、それに基づいて自分の見解を述べる準備があった。原子論を知りもしないのに、それをにべもなく否定するような無知は、彼のあずかり知らぬところであった。この点は評価できる。しかしながら、エピクロスの原子論に基づく人間生成論に対する批判 (Text 4, Text 6)、原子論的神観に対する批判 (Text 5, Text 7) および神慮否定に対する批判 (Text 8~Text 10) を明言する引用は、いずれもエピクロスの原子論的哲学に対してエウセビオスは否定的であることを示すと見なければならない。

本稿の冒頭において、エウセビオスの「特にこの私が感服するエピクロス派の人たち」(Επικούρειοι, οὓς καὶ μάλιστα ἔγωγε ἐθαύμασα) という文言を挙げたが³⁷、それはエピクロス哲学に対する無条件の肯定を示すものではなかったことは、今や明らかである。むしろそれは部分的肯定というべきものである。実際のところ、エウセビオスの肯定は、迷信的託宣の拒絶とエピクロス学派の一致と和合の二点に限られる。とはいえ、その肯定は、他のキリスト教教父たちとは異なり、便宜的なものではなく真摯なものであったといえる。

37. *PE*, iv. 2. 13; iv. 3. 14.

The “Affirmative” Response of Eusebius to the Philosophy of Epicurus

MIKAMI Akira

KEYWORDS: Eusebius, *Praeparatio evangelica*, Epicurus, H. Jones

This article is an attempt to deal with the response of Eusebius to the philosophy of Epicurus in his missionary book, *Praeparatio evangelica* and examine whether his response is affirmative and if it is the case, to what extent it is so. According to H. Jones, *The Epicurean Tradition* (Routledge, 1989), among the overall negative responses of the Early Church Fathers to the philosophy of Epicurus, there are exceptionally a few cases which are seemingly affirmative, however they are in close scrutiny not wholehearted but reluctant ones adopted conveniently for the furtherance of Christian doctrines.

In contrast to this convenient attitude, Eusebius (c. 263 - 339 AD), bishop of Caesarea, made, in the above mentioned book, such a remark as “ Epicureans, in whom what I most admire ”(iv.2. 13), which might be taken as a more candid affirmation. Actually this is not the only reference to Epicurus, his philosophy and the Epicureans. There are a lot more references to them, although not in the form of his own words but of the quotations from various writers through whose words he intimates his opinions. The analysis of these quotations is the main task of this article. The writers dealt with are the followings:

Diogenianus, a Greek grammarian from Heraclea in Pontus (or in Caria) (fl. 117AD - 138 AD)

Diodorus Siculus, a Greek historian of the 1st century AD

Plutarch (c. 46AD - 120AD)

Dionysius of Alexandria (c. 200AD - c. 265 AD), bishop of Alexandria and disciple of Origen

Atticus (110 BC - 32 BC), a devotee to the philosophy of Epicurus

Clemens of Alexandria (c.150AD - 215AD)

Oenomaus of Gadara (fl. 2nd century AD), a pagan Cynic philosopher

Numenius of Apamea, a Greek philosopher, who lived in Apamea in Syria and flourished during the latter half of the 2nd century AD

The conclusion drawn from our analysis is that Eusebius' affirmation is minimal and is restricted to the rejection of superstitious oracles, the moral character and honorable poverty of Epicurus and the fraternal unity of his followers. Otherwise Eusebius is in the large degree negative to the philosophy of Epicurus, especially to his atomic explanation of nature, his atomic view of gods and his rejection of the divine providence.

